

# 竹取物語 R さんバージョン

ガブリエル

## 第1章

---

むかし、むかし、ある所に  
おじいさんとおばあさんが住んでいました

2人は、貧乏でしたが、  
仲良く暮らしていました

しかし、子供が居ないのが、  
少し寂しいと思っていました

ある時  
おじいさんが、山に芝刈りに行くと  
一本の竹が黄金に光っていました

不思議に思ったおじいさんでしたが、  
持っていたナタで切ってみる事にしました

すると、なんという事でしょう！  
竹の中から、小さい女の子が出てきました

おじいさんは、その子を家に連れて帰り、  
おばあさんと一緒に育てる事にしました

名前は「竹の中にある（要る）」から取って  
ア～ル（R）にしました  
(かなり無理のある設定になっています 笑)

Rは、あっという間に育って  
綺麗な女の子になりました

すると、あまりの綺麗さに  
国中から、結婚を申し込む人が集まりました

中でも、5人の若者が熱心に求婚を申し込んで来ました

Rは、最初は、ずっと断っていましたが、  
あまりにもしつこいので、  
条件を出して、  
それをクリア出来たら、結婚してあげるといいました

その条件とは、  
イギリスのマフィン  
フランスのマカロン  
イタリアのティラミス  
ドイツのアップルパイ  
ベルギーのワッフル  
をそれぞれ持って来いというものでした

イギリスのマフィンを持って来るよう言われた男は、  
そこまでして、結婚なんかしたく無い  
と言って、持って来る事を放棄しました

次のフランスのマカロンを取りに行った男は、  
フランスまで行きましたが、  
結局、言葉が分からずに、買って来る事が出来ませんでした

イタリアのティラミスを取りに行った男は、  
イタリアが気に入ってしまい  
イタリアの美女と結婚して、  
イタリアに移住してしまいました

ドイツのアップルパイを探しに行った男は、  
ドイツまで行って、無事にアップルパイを買えたんですが、  
帰ってくる途中で、お腹が空いて、食べてしまいました

最後のベルギーのワッフルを探しに行った男ですが、なんと、1週間後にワッフルを持って帰ってきました

それを受け取ったRさんは、  
食べて、一言言いました

「これは、ベルギーのワッフルじゃ無いわ  
近くにあるコンビニに売ってあるワッフルを  
パッケージだけ変えた物ね  
こんな偽物で私を騙そうなんて、  
もう、誰とも結婚はしません！」

その後、Rさんのわがままぶりを沢山の人が聞いて、  
結婚を申し込む人は居なくなりました

しかし、その日を境に、  
Rさんは、物思いにふけるようになってしまいました

日を追うごとに、夜になると月をみながら、溜息をつく日が増えて来ました



ある時、おじいさんがRに言いました  
「Rよ  
何か悩み事があるなら、言いなさい」

すると、Rさんは、驚く事を言い始めました

「実は、私はこの国の人間では無いのです  
もうしばらくすると、使いの者が私を迎えに来ます」

「えっ！」

それを聞いた、おじいさんもおばあさんも驚いてしました

「もしかして、Rよ  
月から迎えが来るのかい？」

おばあさんは、気になった質問をしてみました

すると、帰って来た答えはこうでした

「おばあさま、月からではありません  
実は、私はお菓子の国の女王なんです  
このたび、女王になる為に  
この国に来て修行をしていたんです  
本当は、すぐに帰るつもりだったんですが、  
この国のお菓子が美味し過ぎて、  
つい長く居すぎてしましました」

「Rよ  
まさか、お前が女王様だったなんて  
その迎えは何時やって来るんだい？」

「今月の満月の日にやって来ます  
おじいさま、おばあさま  
育ててもらったご恩は一生忘れません」

そして、とうとう、満月の日がやって来てしまいました  
Rさんが月を見上げていると、  
月から馬車の様な物がやってきました

「さあ、女王様、お迎えにあがりました  
この馬車にお乗りください」

「おおRよ  
どうしても帰ってしまうのかい？」

おじいさんとおばあさんは、この数日間ずっとRを説得していました  
しかし、Rさんの意思は固く、お菓子の国に帰る事になりました

「おじいさま、おばあさま、  
私の代わりといつてはなんですが、  
こちらを差し上げます  
これを私だとと思って大事にしてください」

Rは2人に一枚の手紙を渡しました

そして、Rは馬車に乗って  
お菓子の国へと帰って行ってしまいました

Rさんが残して行った手紙には、  
なんと、お饅頭の作り方が書いてありました

その後、おじいさんとおばあさんは、  
Rから貰った手紙のレシピでお饅頭を作り  
それを売ることを商売にして、  
一生、お金に苦労すること無く生活しましたとさ

□

めでたし、めでたし

おわり